（第三種郵便物認可）

# める〝理想郷〟

歴史、文学、風土、食、文化をテーマにした新しい旅を提案する「大人の旅」（主催・読売新聞東京本社、JR東日本、JTB）。東北六県と新潟県を対象に選ばれた二十八の魅力あふれるコースの中から、「八戸港町・食の町と奥入瀬渓流」（青森県）、「宮沢賢治の愛したイーハトーブ」（岩手県）の二コースを紹介する。

## 「大人の旅」特集

## 賢治の愛したイーハトーブ

### ゆかりの地で 童心に帰る

いつまでも飽きずに空を見上げていた子供のころ。鮮やかな虹の色や、静かに降り続ける雪が、たまらなく不思議だった。

出会うものに驚嘆する感覚をいつ失ったのだろう。

宮沢賢治の童話や詩は、あのころの感覚を呼び起こしてくれる。雲間からこぼれる太陽を「そらいっぱいの／光でできたパイプオルガン」と呼び、小岩井農場の雪解けを「どんなに新鮮な奇蹟だろう」と驚く。何でもないことを不思議に思う感受性は、まさに子供そのものだ。

「好奇心のかたまりのような人」と盛岡白百合学園高校の安倍富士男教諭(41)も言う。「石ッコ賢さん」と呼ばれるほど鉱物に詳しいかと思えば、チェロを弾いたり、エスペラント語にのめり込んだり。地質学や天文学の深い知識も、想像力豊かな作品を支えていた。

「鞍掛山や小岩井など、岩手を歩いて『いい場所だな』と思うところは、たいてい作品に登場する。足取りをたどると、賢治が丹念に歩いた様子が分かります」

賢治好きが高じて一九九六年、ホームページ「宮沢賢治の世界へ、ようこそ！」を開設した。自ら撮った写真とともに、ゆかりの地を紹介している。

インターネットを通じて始まる、見知らぬ人との交流が楽しい。横浜市の小学生は「永訣の朝の『あめゆじゅとてちてけんじゃ』は、どう発音するんですか」とメールで質問してきた。

「詩に曲をつけてみた」と楽譜が届いたり、「助手になってほしい」と米国の研究者から頼まれたこともある。

「どんなに忙しくても質問には必ず答えます」と安倍教諭。賢治を知りたい人にとっての「橋渡し役」を目指している。

◇

「賢治先生の家」と親しまれている建物が、故郷の花巻農業高校（岩手県花巻市葛）にある。同校の前身・花巻農学校を辞めた賢治が二年ほど生活した羅須地人協会だ。六九年、かつて教べんを執った同校の敷地内に移築された。

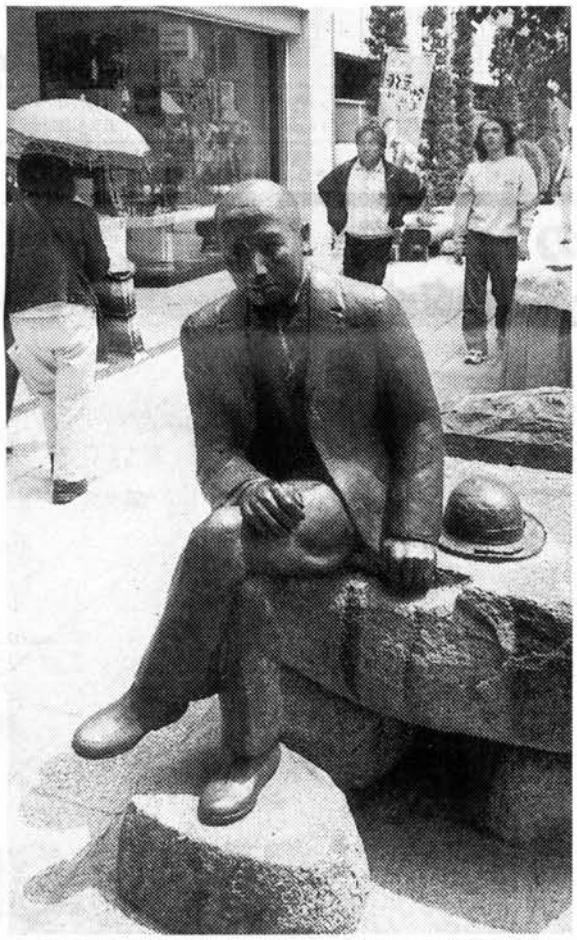
ここで賢治は、病に倒れるまで、稲作の出来を心配したり、近所の人の肥料相談に応じたりしていた。木造二階建ての建物には足踏み式のオルガンや火鉢が置かれ、当時の様子を伝えている。

建物を毎日掃除するのは同校の生徒たち。二年の橘育代さん(16)は、「賢治さんは『遠くて近い人』。本でしか知らないけど、いつも掃除をしてくれる近に感じます」と話す。

◇

生前に唯一出版された童話集「注文の多い料理店」。「注文の多い料理店」ばかりで売れなかった話は、装丁に凝ったせいで高価だったうえ、自体が当時は珍しいにさん然と輝く童話集りに売れないため、近校の運動会で景品としたほどだった。

一九二四年に本を「光原社」（盛岡市材木工芸品店として今も同ある。


材木町商店街で帽子を脱いでたたずむ賢治の像

ホームページ「宮沢賢治の世界へ、ようこそ！」のアドレスはhttp://www.morioka-shirayuri.morioka.iwate.jp/kenji/kenji.html

### 独特の食感、キムチとツルツル

じっくり煮込んだコクのあるスープ。弾力がある透明の太麺を、キムチと一緒にツルツル――。その独特の食感が、盛岡冷麺のおいしさの魅力だ。

JR盛岡駅前の「盛楼閣」も、昼時は冷麺目当てに長い行列ができるほどの人気。盛岡を訪れると必ず寄る著名人や、遠く山口県から足しげく通うファンもいるといい、夏場の最盛期には一日一千食を完売する。

スープ作りは午前二時から。牛と鶏をベースに丸一日かけて煮込んだスープ